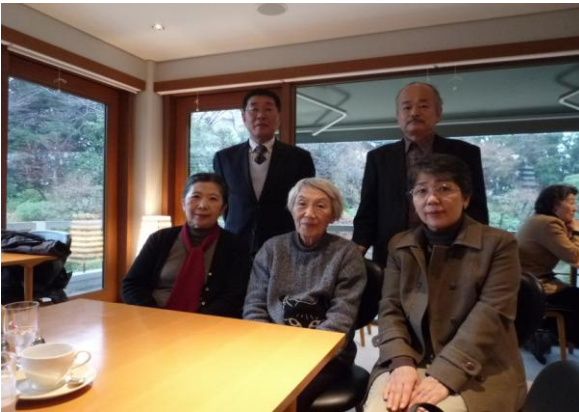


サンフランシスコの咸臨丸

Tokyo Soba Meister Kanrinmaru 団長 ほしひかる

筆者ら 16 名は Tokyo Soba Meister Kanrinmaru というチームを結成し、2010 年の 4 月にサンフランシスコを訪れ、①総領事公邸、②日系人老人ホーム、③さくら祭りレセプション会場の三か所で、蕎麦を打ち、振る舞った。

また、今年は咸臨丸遣米 150 周年にもあたるため、出発前には[1]勝海舟の曾孫様を表敬訪問し、[2]勝海舟邸跡(両国、赤坂、洗足池)、[3]浦賀の咸臨丸出航記念碑を訪れ、サンフランシスコにおいては(1)リンカーン・パークの咸臨丸入港記念碑と、(2)Colma の日本人共同墓地に改葬されている源之助・富蔵・峯吉のお墓参りをし、木村、勝以下咸臨丸の乗組員に対し尊敬の念と同志のような共感をいただいたので、この拙文を書いた。



【勝海舟の曾孫様をお訪ねして】

移すと、島が在った。さらに近づいていくと、市街がはっきりしてきた。初めて目にする異国の街サンフランシスコは山を背にして海に明るく臨んでいた。目を凝らせば、大砲がずらりと並んでいる。まるで城累のようであった。

乗組員たちは甲板に集まっていた。我を忘れて佇んでいる者もいた。「アメリカだ、アメリカだ。とうとうアメリカに着いたぞ！」と叫びながら小躍する者もいた。

このときの咸臨丸の乗組員は、軍艦奉行：木村摂津守嘉毅(31 歳)、船将：勝麟太郎(38 歳)をはじめとして計 94 名だった。

木村摂津守嘉毅、勝麟太郎、佐々倉桐太郎、鈴藤勇次郎、浜口興右衛門、根津欽次郎、小野友五郎、伴鉄太郎、松岡盤吉、赤松大三郎、肥田浜五郎、山本金次郎、岡田井蔵、小杉雅之進、中浜万次郎、吉岡勇平、小永井五八郎、牧山修卿、田中秀安、中村清太郎、木村宋俊、大橋栄次、福沢諭吉、長尾幸作、齋藤留蔵、秀島藤之助の、士官 26 名、船大工・鍛冶役 2 名、塩飽衆水夫 35 名、長崎出身の水夫 31 名、



【浦賀、咸臨丸出航記念碑】

咸臨丸が浦賀港を出帆したのは今年の1月19日だった。幕府が北米合衆国へ日米条約批准交換のための使節(正使：新見豊前守正興、副使：村垣淡路守範正、目付：小栗豊後守忠順)を派遣することを決めた。その使節団が乗る米国軍艦 Pawhattan 号の先駆けとして、咸臨丸はサンフランシスコに直航したのであった。難破した米艦の海軍士官 John M. Brooke ら11名が乗船しているとはいえ、日本人だけで太平洋を横断してアメリカへ向かう

ことは、日本国開闢以来の大冒険であった。出港の日、浦賀の海は西風が強かったが、空は快晴であった。

しかし振り返ってみると、37日間の航海中はほとんどが雨混じりの日や嵐の日ばかり、晴れた日は僅か五、六日しかなかった。船は連日大揺れで、飯すらも椀いっぱい詰めて込んでその上から汁をぶっかけ、立って食べる始末であった。そのことに士官たちは苛立ち、水夫に当たった。しかし水夫たちは荒っぽい。刺青をしている男も何人もいた。そんな水夫たちと士官がいがみ合うことも多々あったが、それも今日で終わりだ。

咸臨丸はサンフランシスコ湾の第九埠頭辺りに投錨した。

陸地になるVallejo ^{ヴァレーホ}には、遥かなる異国からやって来た日本人を一目見ようと市民たちが蟻のように集まっていた。湾内には各国の船舶が停まっている。



【サンフランシスコ、咸臨丸入港記念碑】

それを眺めながら船将の勝は「どうだい。長さ三十間の小艦が、とうとう二三〇〇里の荒海を渡り切ったぜ」と、アメリカの海軍士官ブルックに向かってきっぱりと言った。

軍艦奉行の木村は、これからの事について打ち合わせをさせるためにブルックと佐々倉桐太郎、浜口興右衛門、吉岡勇平、中浜万次郎を上陸させた。

その夜、つまりアメリカでの第一夜は、昨日までの悪天候が嘘のようだった。勝は甲板に出た。夜空に浮かぶ月が静かに波を照らしていた。勝は懐紙を取出し、矢立の筆を抜いて悠然と漢詩を書いた。

瓢花無限界
烟浪一維船
遥瞻鷺嶺月
不以故山天

2月27日、テシュメーカー市長ら市幹部が来船し、木村、勝、山本、小野、肥田、岡田、牧山、中浜を馬車に乗せて、波止場から1500メートルほど離れたジャクソン街のインターナショナル・ホテル(848 Kerney St.)まで案内した。みんな馬車に乗るのは初めてである。車内から眺める市街には三、四層の煉瓦造りの家屋が並び、窓はガラスが張ってあった。

道端には見たこともない、花や樹木が植えてある。聞けば、市の人口は6万と数千人ほどだという。そのアメリカ人たちが東洋からやって来た人間を一目見ようと集まって来ている。その騒ぎは、まるで神田明神か、日枝神社か、浅草神社の祭のようであった。

28日正午、大砲の音がサンフランシスコ湾に響き渡った。両国で祝砲の交換が行われたのである。日本側は佐々倉が撃った。

29日、奉行の木村はシスコにおける心掛として、「私に酒食すること、外泊すること、単独行動をすること」は絶対まかりならぬとお達しを出した。

サンフランシスコは市をあげての歓迎大勢だった。連日、市長、役人、議員、軍人、各国領事、新聞記者、そして彼らと一緒に来た女性らと応対した。皆、金髪、赤い髪、青い目ばかりである。

3月1日、ワシントン街のピーター・ジョブス・ホテルでは軍楽隊付きの大宴会だった。彼らが奏でる曲は勇壮で、こんな音楽は日本では太鼓の演奏以外聞いたこともなかった。

席上、軍艦奉行の木村は日本を代表して挨拶をし、「もう一度、健康を祝して乾杯をしようではないか。」と呼びかけた。

アメリカ人は喜び、木村の礼儀正しさに多くの人が好感をもった。

中浜は、「勝さんは時代を読むのに長けているが、木村さんは人の気持ちをくむのに長けている」と感心した。

乗組員たちも、木村が出したお達しのお蔭で、規律を守る日本人として評判はよかった。

そんななかで腰の日本刀と絹地の衣服は物珍しかったのか、多くの人が「ちょっと触らせてくれ」と馴れなれしく近寄ってきた。反対に日本人たちは靴のまま歩くホテルのブ厚い絨氈が珍しかった。ともあれ、訪ねる者も、迎える者も、互いの好奇心を満足させ、歓迎会は大成功だった。

しかし、楽しいことばかりではなかった。航海中から衰弱がはなはだしかった水夫の源之助(塩飽広島出身・25歳)と富蔵(塩飽佐柳島出身・27歳)が入院した。そして傷んでいる咸臨丸も修補しなければならなかった。

3月3日、咸臨丸はサンフランシスコより七里ほど北のメヤアイランドという所の造船場に入り、一行の宿舎も近くのホテルに決まった。船の修理の指揮はマクデュガルという男がとった。日本側は鈴藤、浜口、吉岡、それに水夫、火夫たちがアメリカ人と一緒になって働いた。

9日(米国時間：3月29日)、咸臨丸に遅れること2週間目にしてポーハタン号がマストに日の丸を翻してヴァレーホ沖に入って来た。ポーハタン号が浦賀を出たのは咸臨丸の3日後だったがハワイ航路をとったため、この日になったのである。正使団一行はすぐに咸臨丸乗組員がいるメヤアイランドへやって来た。正使団の新見、村垣、小栗らも元気そうであった。異国の地での出会いを果たした彼らは抱き合って無上の喜びを表した。

目付役の小栗が真剣な目をして訊いてきた。「勝さん、アメリカ文明の印象はどうだい。」

勝はまず歌で応じた。「月見れば 同じ国なり 大海原 五百里 千里 立隔つとも…………。」

歌の文句につられ小栗は窓のところへ行って、霞のかかった春月を見た。

その背中に向かって勝は言った。「小栗さん。マァたいしたことはござんせんよ。所変わ

れば品変わるってヤツですよ。」

「同じ月か。日本人も、アメリカ人も同じ人間だと言いたいのだな。」

「小栗さん。ただ、アメリカってえ国はてえへんな国だ。狭い日本の中で、勤皇だ、佐幕だ。薩摩だ、長州だと、吠えてる暇はござんせんよ。」

小栗は深々と肯いた。

対して勝は「ここまで来て、おれはやっとそれが分かった」と言って、ニヤリと笑った。それ以上、勝は言わなかったが、直感的にアメリカという国をすでにつかんでいた。勝が見るところ、日本との取引をアメリカは望んでいるが、その暁には日本の先にある中国やアジア各地との貿易の道が開けるのだと考えているようだ。アメリカ人というのは戦国時代の野武士のようなところがあった。捕鯨大国のアメリカは、灯火の油に使うためだけの鯨を求めて嵐の海・太平洋を荒し回っていた。とうぜん台風の季節には日本で避難したい。ところが、わが日本は国を閉ざしていた。野武士のアメリカはいきなり戸を蹴破って、銃をドンと机の上に叩きつけて、開国を要求してきた。幕府は震え上がった。これが黒船ショックであった。

しかし、当のアメリカ人はそんなことは何処かに置いてきたかのように、歓迎の嵐である。アメリカ人の前へ進もうという意欲はたいへんなものだと思った。「小栗さん。アメリカ人は‘人’がいい。しかし、アメリカという‘国’はそうはいかん。ワシントンへ行ったら、ようく、ブキャナン大統領の腹の中を見てきておくれよ」と言いたかったが、面倒になって、ニヤニヤ笑うだけにした。

11日には、サンフランシスコのVIPたちがインターナショナルホテルに大勢やって来た。正使団に歓迎の挨拶に来てくれたのである。歓迎の言葉や握手が一通り終わったころ夕食の時刻となった。食卓には正使団が初めて目にする洋食が並んでいた。

氷水、小魚入の鳥出汁スープ、パン、鶏の丸煮、バターライス、牛肉の塩漬、ブロッコリーのお浸し、白豆煮、パイ、生鮭、煮魚、珈琲

「ポ～ン！」というシャンパンの栓を抜く音に驚いて、思わず脇差の柄を握る者がいたり、金銀の大皿に盛りつけられた料理を不慣れなフォーク、ナイフ、スプーンで喧嘩でもするようにやっつけていたが、ホテル側の人間の目には整然として食事をする日本人に映っていた。

18日、正使団は条約を締結するためにワシントンに向かった。新見、村垣、小栗らは使節として差し障りない状態であった。そのため、随行艦咸臨丸の役割は終わったともいえた。副使格である木村もワシントンに行きたい気持はあったが、勝は「木村さん。咸臨丸の名前は歴史に残るよ。日本人の手だけでアメリカに来たということが大事だ。ワシントンなんか行ったら、意味ねえよ」と力強く言い切った。勝の政治力学では、条約を締結するにあたって、正使が相手国の船に乗って行くだけでは立場が弱い。自国の船で、自分たちの腕で荒海を乗り切って、日本の強さを見せなければ、甘く見られる。それがまた後の世のためでもある、と認識していた。だから、その役割を果たした咸臨丸の名は残るといっているのである。

話を聞いた木村もその気になり、他の咸臨丸乗組員と共にサンフランシスコに残った。

それにしても、サンフランシスコに滞在していた約1ヶ月と1週間、毎日の食事にはま

いった。メヤアイランドの宿舎にいるときは、日本人のために魚や米を用意してくれたからまだよかったが、だいたい毎日野牛や豚など四つ脚や鳥の肉を揚げた料理ばかりであった。それもパーティのときは丸ごと焼いている。肉は大きいばかりで、味にはキレも締まりもなく、ちっとも旨いとは思わなかった。とくに辟易したのは脂やバターの臭いだった。アメリカ料理は日本の料理のような清涼感がなかった。旨味が感じられないもう一つの理由は、味付けのせいであった。塩や砂糖や胡椒はテーブルの上に置いてはあるが、そもそも味が淡白で、「イリコや昆布や鰹で出汁をとってない。だから旨くない」と水夫の吉松らが口を尖らせて文句を言っていた。「アメリカ料理は日本の昔の料理法と同じで調味をしていないな」と勝も眉を顰めながら言った。要するに、テーブルの上に塩や砂糖を置いているのは、わが国の奈良・平安時代までと同じことで、鎌倉時代の道元が中国・宋国で学んで以来、日本人は「甘・辛・酸・鹹・苦・淡の六味を調味」するようになった。だが、そんな調理法はアメリカにはなく未だ原始的だというのである。それからアメリカの料理は汁ものも少なかった。出てもナマ温い白い汁は不味いし、平皿に入っているために啜りづらい。どうして汁を皿に入れて、わざわざ匙で飲まなきゃならないのだ。椀に入れて啜ればそれで済むではないか。食事だって、箸だけで十分食えるのに、わざわざ小刀や突き刺すものや匙など面倒な道具を使って不器用そうに喰っている。そういう姿を見ているだけでじれったい。彼らは口々にそう言うのであった。

一行は、日本を発つときは、十分の食料品を詰込んできた。

水 100 石、米 75 石、麦 4 石、引割麦 2 石、大豆 2 石、小豆 2 石、蕎麦粉 6 斗、葛粉 2 斗、香物 6 樽、梅干 4 壺、鶏 30 羽、家鴨 20 羽、豚 2 疋、塩引鮭、野菜、乾物、醤油 7 斗 5 升、味噌 6 樽、砂糖 7 樽、塩 3 俵、松魚節 1500 本、胡椒 2 斗、唐辛 5 升、茶 50 斤、焼酎 7 斗 5 升

これらの食料品の半分以上は残っていた。だから、いっそのこと空地に竈を作って自分たちで飯を炊き、毎日それを食おうかという話にまでなったが、帰路に暴風雨に襲われ漂流する可能性がないでもない。食糧は十二分に貯えておかなければならないため、そうそう手はつけるわけにはいかなかった。それにしても、可笑しかったのは、この味噌、醤油の匂いにアメリカ人たちは鼻を押さえて逃げることであった。それを見て、乗組員たちは笑い転げてしまった。そこへ江戸っ子の佐々倉と根津と赤松の三人が寄ってきた。「ああ、蕎麦でも食いてえな。誰か、蕎麦か、うどんを打ってくれないか」。水夫たちは首を横に振る。「わしらは海の男じゃ。魚捌きならお手のものじゃが、うどん、蕎麦はだめじゃ」。「そうか。それにしても、どうしてアメリカ人は麵を食わねえんだ」。佐々倉がいかにも嘆かわしいという身振りをしながら言い、根津はふざけて「おい、赤松。つゆだけでも啜らせてくれよ」と赤松の胸元あたりを啜ろうとする。赤松が白く光る歯をみせて笑うと、水夫の吉松と大介が下を向いて笑いを堪えている。「何だ、お前ら。何が可笑しいか」と根津が飛びかかろうとする。「すまんこって」。そう言って吉松と大介は仲間の輪から逃げ、離れた所でゲラゲラとまた笑った。それを見て根津は「何だ奴ら、ひょっとしたら、何処かで麵でも喰っていて、それを隠しているんじゃないか」と吐き捨てるように言った。中浜が場を和らげるようにして言った。「江戸のお人は蕎麦が好きですな。私は日本に帰ったら、鰻を食いたい」。「中浜さんは鰻が好きかい。戻ったら、浅草の『やっこ』に行くかい。たま

らなく旨えぜ。」勝が応じると、横から佐々倉がからかった。「勝さんが、鰻好きとはこりゃ驚いたな。芸者好きのまちがいじゃないのかい。」「はは、おれだって客が来りゃ、付き合うよ。」「オイ、鰻の話は止めてくれねえか。涎が出てしょうがねえよ。」根津が怒ったように言う。周りの者も頷きながら、深い溜息を吐いた…。

そんな皆だったが、見たこともない果物やミルクセーキなどの菓子類、そして冷たいアイスクリームは珍しがって食べた。とくに甘いもの好きの中浜は他人の物まで食っていた。男たちは、ガラスコップの中に浮かんでいる氷に驚嘆しながら酒も飲んだ。アメリカの酒は艦内に残って働いている水夫たちにも振舞われた。海の男は酒に強かった。皆、平気で飲みほした。ともあれ、胃袋という奴はアメリカの食事になかなか適応してくれないようだったが、柔らかい布団や、住まいは心地よかった。ある意味では一行が贅沢に慣れてきたような気もした。

このままでは帰路が心配である。奉行の木村は帰国を決断するときだと思った。木村は「日本に戻れば、蕎麦でも、鰻でも、天麩羅でも、死ぬほど食べばいい。もう少しだ」と言って、福澤の肩を叩いてその場から離れた。

福澤は頭を搔いた。福澤は数日前、「天麩羅を揚げてみる」と言って艦内で鮫を揚げたところ、鍋が倒れて火事になりそうになり、えらい騒ぎになったことがあったからであった。

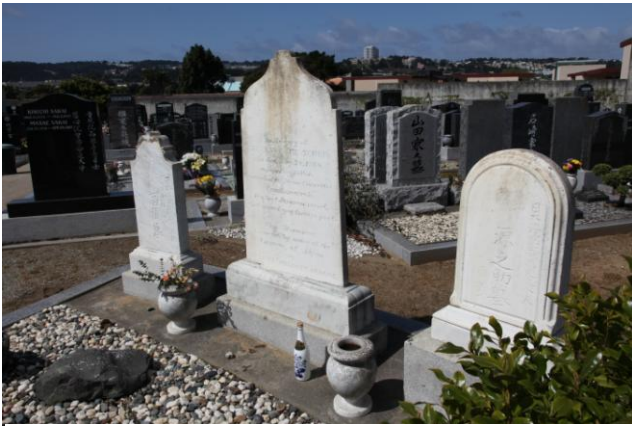
閏3月12日、咸臨丸はメヤアイランドから再びサンフランシスコに戻って、帰り支度を始めた。そのなかで、中浜は、ウェブスター辞書を買った。鈴藤はホテルで飼っていた赤い鳥をシゲシゲと観察していた。「まるで若冲の絵のような鳥だ。」

「ジャクチュウ？ 鈴藤さん、何ですかそれは」。横にいた根津が不思議そうな眼をして訊いてくる。

「伊藤若冲、今から百年以上も昔の日本の絵師だよ。この鳥にそっくりの絵を描いているのさ」。

「鈴藤さん。これからは絵より写真ですよ」と言って福澤は、モンゴメリー街のショウという写真館で、その娘ドーラと並んで撮って持ち帰った。後で聞くと、水夫の向井仁助も、松尾延次郎も、写真を撮っていた。

しかし、熱病に襲われていた源之助と富蔵がとうとう異国の地で死んでしまった。さらに咸臨丸が帰国の途につこうというとき、峯吉、松太郎、治作、好平、延次郎、栄吉、久太夫、滝蔵の八人の水夫が熱病に罹ったため、サンフランシスコの病院に付添の吉松と惣八と共に残されることになった。病人には、米、味噌、鰹節、醤油、梅干が特別枠で与えられた。



【サンフランシスコ、咸臨丸乗組員
源之助・富蔵・峯吉が眠る墓】

ただ残念なことに、病のためサンフランシスコに残留していた火夫峯吉(長崎出身・37歳)が死んでしまった。葬儀は、ブルックに依頼された東洋貿易商 C.W.Brooks (C.W.ブルックスは、後にサンフランシスコ初の日本領事になった) が執り行い、源之助と富蔵が眠るローレル丘に葬られた。共に弔った吉松と惣八は、そこまでしてくれたブルックスを心底から信頼するようになった。



【塩飽諸島、塩飽水主顕彰碑】

同年(万延元年)5月5日(太陽暦日本時間：1860年6月23日)だった。ついに咸臨丸一行の眼に日本一の富士山が見えた。皆は甲板に走ってきた。なかには、富士に向かって手を合わせる者もいたし、航海中ずっとマストに掛けていた金毘羅様の絵馬に向かって深々と頭を下げる塩飽衆もいた。

「帰ってきた。日本に帰ってきた。」と隣の者に抱き付く者もいたし、「やっぱり、日本が一番じゃ」と涙を流す者もいた。

「これで米の飯に味噌汁、漬物が思いきり食えるゾ。」

勝は笑いながら、思った。「さあ、今日からが『日本丸』の航海の始まりだ。これからは嫌でもアメリカなど多くの国々と付き合っていかなければならんだろう。そのためにも、日本は欧米に負けぬほどの実力をつけねば……。」と。

〔完〕

写真：福島和子(江戸ソバリエ・ルシック)、北川庄司(江戸ソバリエ、鶉の会)、ほしひかる(江戸ソバリエ協会)、

注：この拙文は下記資料を参考にして書いたフィクションであり、『日本そば新聞』平成20年7.8.9.10月号に掲載したものを転載、加筆したものです。ご協力に感謝申し上げます。

参考：勝海舟曾孫様のお話、「咸臨丸子孫の会」のホームページ、勝海舟『氷川清話』（角川文庫）、『赤松則良半生談』（東洋文庫）、福沢諭吉『福翁自伝』（旺文社文庫）、土居良三『咸臨丸海を渡る』（未来社）、土居良三『軍艦奉行木村摂津守』（中公新書）、中浜博『私のジョン万次郎』（小学館）、文倉平次郎『幕末軍艦咸臨丸』（中公文庫）、浜田義一郎『江戸たべもの歳時記』（中公文庫）、宮永孝『万延元年の遣米使節団』（講談社学術文庫）、子母沢寛『勝海舟』（新潮文庫）、藤井哲博『咸臨丸航海長、小野友五郎の生涯』（中公新書）、井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』（新潮文庫）、植松三十里『桑港にて』（新人物往来社）、石川榮吉『海を渡った侍たち』（読売新聞社）、久米邦武編『米欧回覧実記』（岩波文庫）、司馬遼太郎『アメリカ素描』（新潮文庫）、㈱にんべん・専務様のお話、